

情報科学研究の実施方策

ー過去から学んだことー

中央大学研究開発機構
片山卓也

社会や産業界との連携

- 情報科学研究の現実との乖離
 - 多くの工学分野に比べ大学からの研究成果が実社会で役に立っていない。cf.材料、電気、機械
 - 産業界が先進技術を受け入れようとしていない
 - 大学の研究が出口を考えない理論研究に深入り
 - 情報科学では面白い理論研究を作りやすい
- 産業界や実社会の困難な問題を先進的な手法で解決する研究に対する投資
 - 大学と産業界との連携チームに対する研究助成
 - 産業界の近代化、特に3Kソフトウェア、IT企業
 - 共同研究を通じた博士学生の産業界への就職促進
 - e-Societyプロジェクト 2003～2006
 - 高信頼ソフトウェア、DB、WEB、音声などの領域の9チーム
 - トップダウン、公募研究無し

息の長い基盤研究支援

- 情報科学は、概念や基盤技術に関しては輸入超過
 - ツール
 - 言語、Coverity、SPIN, ERP, MatLAB/Simlink
 - OS、ネットワーク
 - UNIX, VMware
 - OSS
 - 標準、規格
 - ISO26262,
- 長い時間を掛けて成果を出す研究への支援体制
 - Catchy Buzzword 研究より、本格的で内容のある研究の継続支援
 - 投資対象の選定
 - 通常の論文数による評価は向いていない。

多様な研究の中から次の革新技術

- ある程度広くばらまき、芽を育てる。
 - 科研費の一層の充実
 - プロジェクト研究の公募部分の充実
- 有望な研究の芽の発見と育成
 - 発見と育成のための組織的活動の必要性
 - 類似なものとして、「未踏」
- All Japanは最後の段階
 - 人材育成の観点からは貢献
 - 安定的な研究資金
 - 研究成果の観点から疑問
 - 一定の成果を見せる必要性から形を作りがち、組織的にやり過ぎ
 - 研究代表者はマネジメントに忙殺
 - 研究の実施自体が目的になりがち
 - 科学的な研究事後評価の必要性
 - 正直な目標設定と科学的評価